

おじさんの青春日記

十五周年記念号

MS
15



可敬不可

遅ればせながら、新春の「あいさつ」を申し上げます。

「おじさんの青春日記」は一九九七年（平成九年）の初号以来、毎年書き続け、今年で十五号の節目を迎えます。

今日までつつがなく著作を続けることが出来たのは、読者の皆様からのご声援の賜物にほかなりません。読者からのご激励やご意見は執筆の原動力になりました。

本当にありがとうございました。

年一回の著作に挑むために、本を読んだり、異種、多様な分野の方々のお話を聞かせて頂く必要もあることから、自らに与えられた時間を大切に使う、「寸暇を惜しむ」ことを覚えました。

同時に、表現する行為は右脳、左脳に調和良い刺激を与えてくれ、本質を見極めようとする作業は、私の職業である会社経営のスキルに通じるものがあったように感じています。いいことづくめの十五年間でした。

当初は毎年大晦日近くに刷り上った冊子を国内、国外の読者に宛てて発送し終えたのち、元旦の朝の祝い膳を前にして、お年玉袋とともに息子達に手渡すのが習わしでした。当時、高校生、小学生、未就学の幼児だった四人の息子達は父親からうやうやしく冊子を受け取るものの、視線はお年玉袋へクギ付けでした。

いつの間にか十五回の正月が過ぎていき、息子達はそれぞれがまったく異なった疾風怒濤の時期を過ごして、性根が曲がることもなく成人の境を越えました。インターネット・ホームページでの全作品の公開も実現し、今では日常生活の折り節で、「おじさんの青春日記」に登場した主人公の消息を私に尋ねたり、文中のフレーズを暗（そらん）じるようになりました。彼らは成育する過程で、あっちにぶつかり、こっちで挫けながら、こっそり父親の動静を探ろうとしてくれていたようです。長い歳月を必要としたのち、著者の思いがかなかな響きになって戻ってきたことを実感できるようにになりました。著者が生きた時代の思づかいを次の世代に伝えるとともに、子供たちには思考の種子を残してやる事が出来そうだと感じています。

本年号は思うところあって、「父と子」をテーマとしました。全編、私事にわたる内容となってしまうましたが、「その十五 記念号」の節目に免じてどうぞお許し下さい。

本編に転載してご紹介する私の亡父の追想録「道標」は、私が十七歳のとき、思い立って初めての長編に挑戦したときの著作です。高校の授業中、ノートに走り書きし、父の死後満六年にあたる七回忌を前に一作にまとめたもので、いわば私にとっての処女作です。当時の友人達の応援も得てこの小品を冊子にまとめ、七回忌法要に父の友人達や親族に配布したところ、思いがけない拍手と多額のカンパをゲットしました。また、「道標」の完成を誰よりも母が喜んでくれたことは、今も忘れることが出来ません。

この幸運な成功体験がそれからちょうど三十年後の、「おじさんの青春日記」執筆の動機になったのかもしれない。「道標」の文末に「未完」とあるのは、今日を予感してのことだったのかもしれないと思っています。

今年も、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に「おじさんの青春日記 その十五 記念号」をお届けできることに感謝いたします。

ごとしも皆さまのもとにひとつでも多くの笑顔が訪れますように。

二〇二一年（平成三三年）

立書

里吉賢司

おじさんの青春日記 その15

十五周年記念号

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、
世界じゅうの孤独なおじさん、おばさんに捧げる。

著者 里吉賢司

イラスト・デッサン
栗原俊幸
仏原和義

「おじさんの青春日記」ホームページ
www.urban.ne.jp/home/ojisan

ホームページの「作品集」をご覧の方は画面ではなく、
ぜひプリントアウト（印刷）して
お読みいただきますようお願いいたします。

再会

昨年六月、父の五十年忌法要を営みました。父が死去した年、私は十二歳。小学校を卒業した直後の父の死でした。

父が病に倒れる直前の夏休みのことです。小学四年生の私は父親の有無をいわせぬ命令で、父の友人の大学教師、田井庄之助先生の自宅にひと夏預けられることになりました。学校から帰るとランドセルを放り出したまま、同級生と己斐の山を駆けまわって水壘を探したり、暗くなるまで海や川で遊び呆ける私の日常を見て、父は息子の前途を憂えたのでしょう。そのころの父は五七歳。すでに人生の第四コーナーにさしかかっています。それに父の事業は成熟期を過ぎ、衰退期に入りつつありました。

父は浴衣（ゆかた）のままスクーターにまたがって、まだ原爆の被害が生々しく残る広島町を東奔西走していました。私の小学校へも度々やってきて、授業の最中でも速慮会釈なく教室の扉をガラツと開けて私に声をかけました。級友は父の声に一斉に振り向き、私は顔を赤くしてうつむくだけ。

息子に会うのに誰に遠慮がいるのか、というのが父の理屈です。はげ頭にカンカン帽、それに和服。特異な風貌もあって、友達からは「おじいちゃん」と呼ばれていました。

明治維新の余熱いまだ残る、明治三五年の生まれ。それでなくても頑固な父の命令は、家内で絶対の権威をもっていました。

田井庄之助先生は当時、広島大学文学部の教師。どういつつながりだったのか、田井先生はしばしば我が家を訪れて、昼間から酒を呑んで父と長いあいだ話し込んでいました。何やら古ぼけた書物や木片を手にして、二人はヒソヒソ話

田井先生を見送ったあと父は、

「きようは田井先生が法隆寺にあったとかいう木の茶さじを見せてくれた。飛鳥の時代にもう、お茶を嗜むなどという習慣があったんじゃないか……」と家族につぶやいていました。

田井先生は長机をはさんで父と向かい合うとき、長身瘦躯の身を左右にくねらせたり、机に頬づえをついたり、いつもなんだか落ち着かない様子でした。たいていネズミ色の背広姿、しわくちやのワイシャツ。ネクタイはいつも背広と同じネズミ色でした。ひよろつとした背を丸めて、鴨居をくぐるようにして座敷に入ってきました。

姉達は机の前で舞を舞う女性のような先生の仕草を見て、

「あのセンセイ、歌舞伎の女形みたいじゃあ」

と噂をしていました。四十歳前で独身の田井先生に、父母はしばしば縁談をもちかけていたようです。

現・広島市西区草津町は当時、宮島街道にそって波が打ち寄せる海辺の町でした。街道の脇に魚市場があつて、たくさんの魚介が毎日荷揚げされ、威勢のいい仲買人たちの怒声が市場じゅうにこだましていました。市場を取り囲むように入り組んだ路地には小さな魚屋や、かまぼこ、竹輪などを商う店が生臭い匂いをふんぶんとさせて軒を連ねています。街道をしばらく西へ行くと、突然左手に瀬戸内海が開けます。

「先生の家の前はすぐ海なんよ」

という母親の誘惑にも惑わされて、私の夏休みが始まりました。

先生の自宅は線路沿いにある小さな二階建ての洋館。後年、ヒチコックのスリラー映画「サイコロ」の舞台になった洋館の建物を見た瞬間、田井先生の自宅が脳裏によみがえりました。

玄関に向かって左手には山肌がせまっついていて、一階の洋室と山の断崖に挟まれるように小さな湿地帯がありました。そこには缶詰の空き缶が山のように積まれていて、でっかくて赤い爪をした弁慶蟹がそこそそ遊んでいました。彼らは一人ぼっちの少年の格好の遊び相手になりました。

先生の家での朝、昼、晩の食事はたいてい缶詰と木綿豆腐。家の脇に山と積まれた空き缶の意味がこれで解りました。二人だけの朝食を済ませると、先生の講話が始まります。この講話を終えて、昼食の片付けがすむまでは遊びに出してもらえません。

先生は濃灰色の着流しの和服に黒の袴。二人の部屋を包みこむような蝉しぐれのなか、長身の先生と、瘦せて豆粒のような小学生の私が和室の机をはさんで正座します。先生はたわいない古今の話を長々と続けます。それは日本やアジアの国々の通史であつたり、明治の文豪のエピソードであつたり。

「時は鎌倉時代、北条時頼の時代です。わかりますか？鎌倉時代。日本の歴史のなかで初めて、武家、サムライが実権をもって市民に命令し始めた時代です。その頃の執権、あつ、シッケンというのはサムライの親分のこと。この親分が貧しいお坊さんに姿を変えて、こっそり自分の領地を見てまわっています



た。領民のありのままの暮らしぶりを観察してまわるのです。ある雪の降る夜のこと。その夜泊まる宿のあてもない時頼は、山のなかに一軒だけ明かりのついた家の扉を叩きます……」

こんな調子です。のちに知った、歴史物語「鉢の木」の一節です。

先生の話のあいだじゅう、私はお寺の小僧のように何度も正座をくずし、また座り直して耳を傾けます。大学生相手とは勝手が違って、小学四年生の私に飽かせず話を聞かせるために、先生は大いに苦心したに違いありません。

田井先生はしばしば中国の古典を私に薦めることがありました。和綴じされた書籍を前に置いて、孔子の論語や老子の言葉を朗々と読んで聞かせたのち、その意味を解説します。そして、読み上げた古典の言葉を私にひらがなで紙に書かせ、それを私が再び読みあげるのです。

子曰く 君子は重からざれば則(すなわ)ち威あらず。学も則ち固からず 忠信を主とし 己に如(し)かざる者を友とするなかれ。誤ちてすなわち 改むるに憚(はば)か(る)ことなかれ。 【孔子】

人を知るものは智なり。みずから知るものは明なり。

人に勝つものは力あり。みずから勝つものは強し。

足るを知るものは富む。強(つ)とめて行うものは

志(こころざし)あり。 【老子】

真夏の朝の陽が差し込む洋館の一室。高くもなく低くもない、田井先生の細い喉(のど)が中国古典の一節を響かせました。私はまるで古歌でも聴いているように、考えることもなくその音だけを聴いていました。

窓(まど)越しに見える瀬戸内海の海は大魚のウロコを剥(む)がしたようにキラキラと輝いて、あたかも長江を往来する小舟のような牡蠣(かき)いかだが遠く遠なっていました。

十歳の少年はあまりにも幼なく、あまりにも無知でした。彼が孔子や老子の世界にふたたび出会い、みずから理知を探り始めるにはそれからしばらくの歳月を要しました。

私が長じたのち、中国の古典にふれるようになって、あの小学生の時の懐かしい古文の一節にしばしば遭遇することがありました。今振り返れば、田井先

生の講話は孔子の論語よりも、その世界観において孔子とは対照的な存在ともいえる、老子の発想によるものが多かったような気がします。

ひどく難解ながら胸腑張らず、あくまで自然で、制約を感じさせない老子の世界。利の獲得や立身のための競争とは無縁の、学究世界に棲む文学部教師の田井先生は老子の説を好んだのかもしれない。

リーダーのあるべき姿や心構えを説き、教訓的で自制を基調とする儒教、論語の世界。日本で長く続いた武家の治世、近代における維新、度重なる大戦の遂行、そして日本敗戦後の奇跡的な経済発展を推進したリーダーや知識人たちにとって、「仁・義・礼・智・信」の儒教の教えが、彼らの明快かつ効率的な行動規範になったことは否めません。対して老子は、人間は自然界のひとつの生きものであり、力みかえることをやめて自然体であれ、と戒めています。

「民に利器多くして 国家ますます昏（みだ）る」。便利な道具やござかしい知恵は人にいつときの豊かさや時間の余裕をもたらすが、同時にそれは人々に怠惰と精神の貧困をもたらす。目先の知恵や欲望に駆られて動きだすところに人の不幸が生まれる。おのれの持つものをあらためて吟味すれば、そこには充分満足すべきものがあることを発見できるはずだ。どうして君はみずから我が身を縛って、あくせくと不自由な日々を送るんだ。

功名？ 欲望？ 栄達？ 財？ 地位？ それがいっただうしたというのだ。やがて君はその立場や地位から離され、身につけた見識も財産も朽ちてしまつたろう。そして遠からずその身は、風が吹いたあとのように無となつてしまふんだよ。

論語とは明らかに異なる老子の視点がそこにあります。

そしてまた老子の言葉には、老子自身も含めた当時のインテリ達とは違い存在であったに違いない、圧倒的多数の庶民への温かなまなざしを感じさせます。

民のほとんどは太陽と水の恵みを糧に日々生をつなぎ、人と情けを交歓しながら時代を生きてきたのです。歴史の出演者として名を残すことはないけれど、彼らこそ、歴史を刻んだ真の主人公だったと私は考えています。

いま私の手元に二冊の本があります。

その一冊は、今から約二五 年前に生きた古代中国の思想家、老子が残した言葉を、現代作家・新井清氏が感じるまま、思うまま自由に訳した老子の現代訳本「自由訳 老子」です。

老子 第四八章

学を為せば日々に益(ま)し 道を為せば日々に損す。
これを損じてまた損じ もって無為に至る。

無為にして為さざるは無し。天下をとるは常に

無事を以てす。

其の事あるに及んでは 以て天下を取るに足らず。

自由訳

世の中の行いには

足し算と

引き算がある

足し算は、たやすいが

引き算は、案外むずかしい

新しいことを一つ始めるよりも

余分なことを一つ減らしなさい

有益なことを一つ始めるよりも

無益なことを一つ減らしなさい

意外に思われるかもしれないが

そうする方が、きつとうまくいく

学問をおさめると

知識の量は日に日に増えていく

しかし、だんだんと

つまらない大量の知識にしばられて

精神の自由はうばわれて

身動きがとれなくなってしまう

ところが

道(Dao)に目ざめた人は

日に日に知識の量を減らしていく

よけいな知識をどんどん減らしてゆき

さいごには

無為の境地にたどりつく

知識にしばられていた精神は

解放されて自由自在になる

何ものにもこだわらず

あるがまま自然に生きられるようになる

ゆつたりとおおらかにね
それが道(Dao)の人の
生き方なのだよ

老子 第一五章

古(いにし)えの善く道を為す者は、微妙玄通、
深くして讎(し)るべからず。夫(そ)れ唯だ讎るべからず。
故に強いてこれが容を為さん。
予として冬に川を渉るが若(じ)く、猶(ゆ)うとして
四隣(しりん)を畏(おそ)るるが若く、饑(げん)として其れ
害の若く、渙(かん)として其れ氷の將(まさ)に積(と)けん
するが若く、敦(とん)として其れ模(ぼ)くの若く、
曠(こう)として其れ谷の若く、混として其れ濁れるが若し。
孰(たれ)か能(よ)く濁りて以てこれを動かして徐(おもむ)るに
清まん
孰か能く安らかにして濁りて以てこれを動かして
徐るに生ぜん。
此の道を保つ者は、盈(み)つるを欲せず。夫れ唯だ盈つる
を欲せず。故に能く傲(やぶ)れて而も新たに成る。

老子 第四一章

上士は道を開けば 勤めてこれを行う。中士は道を開けば
存(あ)るが若(じ)く亡きが若し。下士は道を開けば、
大いにこれを笑う。
笑われざれば、以て道と為すに足らず。
故に建言(けんげん)にこれ有り。明道は昧(くら)きがごとく、進道は退くが
若く、真道は齟(らい)なるが若し。
上徳は谷の若く、広徳は足らざるが若く、建徳は偷(おこた)るが
若し。質真は渝(かわ)るが若く、大白は辱(じょく)なるが若く、
大方は隅(かど)無し。大器は晩成し、大音は希声、大象は形無し
と。

道は隠れて名なし。夫れ唯だ道は、善く貸し且つ善く成す。

自由訳

道 (Dao) に目ざめ

道 (Dao) につながった人こそ

真の指導者になることができる

その特徴をあげてみようか

まず慎重である

氷の張った河面を渡る時のようにね

次に、用心深い

四方を敵に囲まれた時のようにね

つねに端然として乱れることがない

よその家に客として招かれた時のようにね

人柄は純朴で飾り気がなく親しみやすい

山から伐り出されたばかりの原木のようにね

心は広く、深い

まるで大渓谷のようにね

その水は清く澄みわたり

私利私欲に汚れることがない

それでいながら世俗のにごりに汚されること

をいとわない。やがてにごりは自ら沈殿してゆき

水はいつのまにか清く澄んでいる

彼は何をしたのか……？

何をしたわけではないのだ

世俗のにごりを自ら進んで浄化する人々の力

を信じ、いのちのエネルギーにゆだねたのだ

無為にして、無心

余計なことは一つもせず

ただあるがままを受け入れただけなのだ

忘れたがたい特徴をもう一つ

彼は他人に完全であることを望まない

ほころびや欠陥があっても動じない

その方がかえって自然ではないかと思う

だから自分自身の成長にも

完成ということを考えない

大器晩成

この言葉をどう解釈すべきか……？

「大人物は、才能のあらわれるのは遅いが

晩年になって完成する」
そのように解釈する人々は多いであろう
しかし、彼はそう解釈しない
そのような解釈は不遜だと思う
彼は、こう考える
そもそも完成などありえないのだ
完成するような大器は、真の大器ではない
真の大器とは、晩年になっても完成しない
つまり永遠に未完成なのである
そんなことを思いながら
水のように
風のように生きていく
ゆったりとおおらかにね
それが道(Dao)に目ざめた指導者の
生き方なのだよ

それにしても、小学生の私をひと夏、田井庄之助先生の自宅に寄宿させた父の深謀はいつたい奈辺にあったのか。田井先生との密談のすえだったのか。父が亡くなつてからというもの、田井先生の足はばたりと途絶えました。墨書の年賀状もいつしか届かなくなりました。



*

そしていま、私の手元にある二冊目の本は、もと大分大学教育学部教授、田井庄之助博士の執筆による随筆撰、「曹源」。

長いあいだ探すともなく求めていた、師・田井庄之助先生の著書をインターネットという技術革新の助けを得て、ようやく手にすることが出来ました。

この古書のなかに「籙呈」と印刷された付箋が挟まっていました。その付箋にはかつて父に届いていた封書の宛名と同じ書体の、田井庄之助先生の墨書の署名がしたためられています。

初版は昭和五八年（一九八三年）。この書籍が誰かの書架を経たのち、古書市場に流れ、時はめぐって私の手元に到りました。

「曹源」を手にしたとき、五十年ぶりにふたたび田井先生の声咳にふれた思い出でした。

「曹源」のページをめくることに、先生の生い立ちや初恋の体験を始めとして、その後しばらくの田井先生の足跡が手にとるように一覽できます。

先生のコレクションと思われる青磁の茶碗や壺などの口絵写真のあとに、三章にわたって短歌や小文が発表年月を付して随筆風に紹介されています。

目次から一部の標題を抜粋します。

- 「思い出の能舞台」
- 「舞踏へのいざない」
- 「武者小路実篤」
- 「平将門」
- 「年越し」
- 「ひなまつり」
- 「久松潜一」
- 「酒の味」
- 「喜寿の祝い」
- 「松坂に遊ぶ」
- 「五所平之助」
- 「正倉院展」
- 「続 奥の細道」

田井先生は能や歌舞伎などを中心とした、中世、近世日本の芸能史に通曉した研究者であり、同時に茶人であり、歴史家でもあったことがわかります。小学生の私が先生から受けた印象のとおり、文章は繊細で枯れた野のように素朴です。いかにも研究者らしく観察、描写の細部までが澄んでいて、行間には幽玄ささえ漂っています。

そして「曹源」巻末の「あとがきをかねて」のなかに、先生の広島大学時代の回想がふれられています。

「……大学卒業後のことを少し話そう。卒業の時、教授に大学に残らないかといわれ、副手でということ、ありがたくお受けした。その頃、副手は無給がふつうだったが、有給でということだった。二年たつて助手となったが、折から新制大学となり、文学部に籍をおいた。（昭和）二十四年のことである。住所も転々としたが、（昭和）三十年以後は宮島線の学長官舎のとなりの小さな洋館で過ごした。近くには森戸辰男学長と書道の大家井上桂園先生がおられ、たびたびおじゃました。山本空外博士の邸宅も近かった……」

注・（ ）は著者

ああ、鳴きたてる蝉しぐれにおおわれた、あの古ぼけた洋館。そしてあの頃、大きな赤い爪の蟹たちのいた崖の上には、田井先生にとつておそらく雲の上の大先輩に違いない、大学学長や碩学達の自宅もあったんだ……。

当代最高峰の教養人たちが集って住まうあの森で、無限、無尽の思索の世界がこの世にあることすら知らない一人の小学生が、無邪気に蟹を追いかけて夏の日を送っていたのです。

「曹源」の奥付にある著者略歴を見ると、田井庄之助先生は一九二二年（大正十一年）のお生まれ。

もう、生きてお会いすることは叶わないところにおられるのだろうか……

*

平成二三年正月の四日、大分大学から電子メールが届きました。

「お問い合わせありがとうございます。」

大分大学教育福祉科学部総務係、衛藤と申します。

本日仕事始めのため、ご連絡がおそくなりまして申し訳ございません。

お問い合わせいただきました下記の件についてご連絡いたします。

田井庄之助先生

大分県大分市**町*番地*号

電話 九七 ** * ** *

現在、お元気に上記の住所にお住まいです。ことし八九歳になられるそうです。大学からの照会はお奥様にご対応いただきました。お問い合わせの事は奥様にご連絡をしておりますので、もしご連絡等されるようでしたら、大分大学の事務の方に確認の上、とお話しくださいます。

私も午前中、田井先生宅にご連絡した際、御本人とはお話しすることが出来ませんでした。お元気に過ごしているようです。お時間がありましたら田井先生の方にご連絡してみてくださいませ。なお、奥様には連絡先の公開等についてはご了承済みです。

お二人のご関係がとも温かいものだと知り、そのお二人を再度つなげるお役目をさせていただき、今回はありがとうございます。また何かございましたらいつでもご連絡くださいませ。最後になりましたが、よい一年をお送りくださいませ。メールありがとうございます。

それは正月酒に酔ったあげくの、夢のなかで起こった出来事のように思えました。なかばあきらめていた、田井庄之助先生との再会がかなう……

田井先生は北西に由布岳、遠く東には豊後水道・佐賀関の海流も近い、別府湾の真南にあるお宅で夫人とともに老後を養っておられる様子です。

地図を見ると、ご自宅のすぐそばには蛇行する七瀬川が流れて、緑や田畑の豊かな土地のようです。

「曹源」のなかで先生は昭和五五年当時の住まいの情景を、次のように描いておられます。

「うぐいすの美しい泣き声で目がさめた。三月中旬の朝六時前のことだった。急いで起き出し、縁側に立ってみると、二羽、いや三、四羽とんでいる。ひよどりも勢いよくとんでいる。すずめもたくさんいる。麗日（麗日）の空いっぱいには楽団が、楽団ががやかにひるがっているかのようだ。
（中略）リンゴとミカンを半分に切つて梅の木の枝にさしておいた翌朝の出来事である。それから時々やってみると、ひたきも来るし、めじるもやってくる。そして、熱心につついてきれいに食べる。リンゴが好

きらしいが、ミカンも皮だけのこし、その皮もなくなるくらい、みごとにつついている。なんだかいいことをしたような、あるいは友だちになつたような気分だ。……」

温暖な大分の土地で自然のうつろいを友として、ゆったりと陶然たる晩年を過ごしておられる田井先生の姿が想像できます。

そうだ、この寒さが過ぎて、うぐいすが囀く頃になったら、先生をお訪ねしてみよう。

手土産を提げて、あたりを眺めながらゆっくりと山道を登る自分の姿が、脳のスクリーンにぼんやりと浮かんできます。

半世紀ぶりに出会う不肖の弟子を、老師はなんと一言葉で迎えてくださるでしょうが。

参照、引用文献

- 「老子」 (金谷 治 著) 講談社学術文庫
「新訳 老子」 (岬 龍一郎 著) PHP研究所
「論語」 (貝塚 茂喜 訳注) 中公文庫
「論語」でまともな親になる (長山 靖生 著) 光文社新書
「自由訳 老子」 (新井 満 著) 朝日新聞社
「曹源」 (田井 庄之助 著) 桜楓社

この作品の執筆にあたり、

広島大学図書館 図書館学術情報普及グループ 大園 岳雄氏
ならびに

大分大学教育福祉科学部 総務係 衛藤 祐美氏

のお二人から、懇切きわまるご助力をいただきました。
心より厚くお礼を申し上げます。

『道標』は全文一万三千余字の長文のため、本文の一部を
割愛して（中略）とし、一部語句を加除して転載しました。

道標

父の七回忌が近くなった。かねてから思っていた追憶の記をこのしおに書いておきたいと思う。父との思い出はそのほとんどが私の幼年時代につながる。父は私が小学校五年生の折り、病を得て床に伏した。発病から死にいたるまでの父について憶えていることといえば極めてわずかだから、本当の意味での思い出といえばそれ以前にさかのぼる。

明治三五年三月、父は里吉喜次郎の長男として生まれた。母の名は力子(カネ)。

明治維新からわずか三五年、父が生まれた当時の日本は日清戦争、それに続く日露戦争の戦費支出のために、国家財政は逼迫の極みにあった。当然、庶民の生活も極度の困窮に陥っていた。

父の幼い頃は体も細く虚弱であつたらしく、たびたび発熱する私のひ弱い体を案じながら、

「わしの小さい頃とそっくりじゃ。やっぱり血筋かのお」と、枕もとにたたずんで溜息まじりに嘆いていた。

父の父親、すなわち私の祖父は妻と三人の幼児を残して、早くこの世を去った。一家の柱を失った祖母はまだ幼ない父を親戚に預け、二人の幼児を抱えてその日から身を粉にして働いた。この頃の祖母のことを父から聞いたことは幾度もある。しかしそれはいつもこまねずみのように働く母の姿であつて、我が子を慈しみ育てる母親ではなかった。父は十三歳になって始めて母のもとに帰されたという。

幼きにして一家の戸主となつた父は、早くから世間の風に触れ、二人の幼い弟をその瘦身に背負つて、戦争の続く明治から大正の時代をくぐりぬけた。

父の同世代の者たちはただ学業に専念するだけであつたのに、父は義務教育を終えるか終えないかで桐箱屋に奉公した。わずかに支給される給料も自分の小遣いにするのではなく、そのすべてを家の生活費に充てた。

父から聞かされた当時の思い出話に、私の忘れることの出来ない貴重な話がある。

ある冬の夜のこと。桐箱屋の仕事も終り、数人の職人たちは三々五々家路についた。折から雪も降り始め、父と三、四人の同輩達は仕事場の後仕事も終えて夜も更けたためかるみ道を家へと急いでいた。ある角を曲がったとき、うどん

屋の屋台のちようちんが目に入った。腹は空くし、雷は間断なく肩に積もる。暖かそうな湯気の立ち上る屋台は、雷に震える彼らにとって何物にも増した魅力であったろう。同輩たちは当然のことのように皆を促し、屋台に誘った……。父は一人で無言で家路をたどった。

どんなにあの暖かいうどんの湯気に包まれたかったかしれない。どんなに皆と仕事のあとの無駄話があったかたかたかしれない。当時わずか数銭のうどん一杯にさえも、自分の恣意を通すことは出来なかったという。同輩たちが談笑しながら、屋台の椅子に腰かけるのを後る目で見ながら、父は何を思い、何を考えたらう。

私はこの話を父から何度も聞かされたが、美談として聞かされたことはただの一度もなかった。父はこのような思い出話をしながら、

「あの頃のわしといえは、ただ自分をおさえることだけだったかもしれん。自分が憐れとも、みじめとも思わなかった。義務感からではなしに、ただそうしなればならなかった……。こんな話をお前に理解させるには、あまりにも時代と世相が変わり過ぎた……」

ただ淡々と、こう私に語るだけであった。

私にはそれが幸せ過ぎる私の今の境遇を暗に指摘するような声に聞こえるのである。自分に甘えることの出来る者は、自分のおかれた境遇に幸福を感じることに鈍感になっているのかもしれない。安穩無事のうちに時は進んでいき、己の幸せを忘れていってしまうのではないか。

淡々とした父の青年時代の思い出話は、私にこのことを違った言葉で暗示したのかも知れない。

二十歳に満たないうちに父は独立して、桐箱を造る会社を興した。会社と呼ぶにはあまりにもちっぽけな店だったというが、とにかく数年の労苦が実って人の上に立つ一城の主になった。

それから四年後、母を娶り、様々な艱難の待つ戦時の社会へ飛び込んでいった。戦前、戦中を通しての父にまつわる逸話を逐一書くと制限がない。というよりはむしろ、当時の父の苦勞の有様を的確に書き表すことは、おぼつかない私の筆では到底不可能としか思えない。

昭和十二年、父母に初めての子供が誕生した。長女、啓子である。産声も聞き取れないほどその誕生は弱々しかったが、両親の手厚い保護のもとで啓子はかろうじて生育していった。会者定離のことわりのとおり、昭和十三年には父の唯一の親である母親が老後の安楽を味わうこともなく、ひっそりと死んでいった。

「ただ働くためだけに、この世に生まれてきた」

祖母について父はこういう意味の言葉を何度か口にした。

悲喜こもこものドラマはまだ続く。

昭和十四年には次女淳子が生まれた。男子出生を秘かに期待していた父は、安

産の喜びの陰で期待はずれの色を露骨に表した。昭和十六年一月。男児が誕生した。男の子を待ちわびた父は飛びあがらんばかりに喜び、隣近所に

「男の子が生まれた、男が生まれた。男のしるしがついとる」と、ふれまわった。孝則と名付けた。

しかし、父の喜びも束の間、孝則は二歳で夭死したのである。もともと虚弱だった幼児の体はたびたび消化不良をひき起こし、日に日に増えていくはずの体重は容易に増えることがなかった。ある時、不消化物を口にした孝則は当然のことのように激しい下痢を起こし始めた。父と母は医者を呼ぶほか為すすべがなく、父にいたっては病児の枕もとでただオロオロと動きまわるだけだったという。苦痛を言葉で表すことも出来ない病児は、ただ泣きわめきながら死んでいった。待ち望んでやっと授かった男児をわずか二歳で失った父は、数日間口もきかぬほど落胆し、仕事もいつころにはかどらなかつたという。

孝則の生まれた年の十二月に開戦となった太平洋戦争は日に日に激しさを増し、世間があわただしくなっていくに従って、父の悲しみは徐々に薄らいでいった。そして父の憂心を慰めるように三女洋子が生まれた。十九年にはまたも女兒が生まれた。順子である。この頃、父はとうに男児はあきらめて、次々に生まれてくる女兒を精一杯可愛がった。

父はこの頃すでに桐箱の業を捨て、電気バリカン製造の研究に着手していた。太平洋戦争の戦局は日本にとって日ごとと悪化していき、日本の主要都市は連日のように空襲をうけるようになった。長女の啓子は大竹の母の里に疎開し、外祖母に育てられていた。

父母と三人の子は広島に残り、リアカーに家財道具を積んで連夜、井ノ口の疎開先に通った。往復は空襲の途絶える夜に限られ、リアカーの前は父が引き、母があと押しをした。時にはまだ六歳に満たない淳子が気丈にも一緒に後を押ししたり、乳飲み児の順子を背負ったりしたという。幼い淳子が母を助けて真夜中にリアカーのあと押しをする姿に、母は言葉にならないいじらしさを感じたという。リアカーを押す淳子が眠気のみならず、押しながらコックリ、コックリ居眠りをした話は今も家族の語り草になっている。

日本は敗れた。原子爆弾によって一瞬のうちに灰となった市内を逃れて、一家は井ノ口の疎開先に移った。

のちに私はこの井ノ口の疎開地のあたりを父と歩いたことがある。父は十数年前と変わらない地形を懐かしそうに眺めながら、狭いあぜ道を歩いた。着のみ



着のまま家財道具を抱えて右往左往したこの狭いあぜ道で、いま自分は安定した生活と幸福の自信に満ちてたはずんでいる。戦後生まれた息子は、昔の父の苦勞など知る由もない顔をして、田んぼの草を摘んでいる。戦争というものも、生きる苦しみというものもまるで知らない息子は、自分に見守られながら無邪気に畑のなかで戯れている。苦しい思い出の場所に立って、静かに過ぎ去った昔を反芻している自分にくらべ、息子はなんと活潑な明るさにあふれていることだろう。

父はあの井ノ口へ私を伴って訪れて、このようなことを思ったかもしれない。大きく年も離れた、太った父親とやせた息子は夕暮れのあぜ道をそれぞれ違った感慨をもってあたりを眺めながら歩いた。あののどかな情景が私の脳裏に一幅の絵のように残っている。思い出すたびにそこはかとない笑みをもたらす一幅の絵。風が吹くたびにざわめく麦畑の青が印象に残っているから、あれは夏も初めの頃だったのだろう。

井ノ口の疎開地には一週間とないで、一家は全員大竹の母の里に移り、父はそこから仕事場のある広島へ通うようになった。当初父は母の里に移ることに頑なに反対し、母に説得されてしぶしぶ従ったという。妻の里方に頼るということは、一途な男気の父には耐えられないことだったのではなからうか。

敗戦直後の混乱した世では父の仕事は思うように進まず、わずかな収入ではこれだけの所帯を養うには少なすぎた。田舎のことで周りのものは比較的恵まれた生活を送っているのに、一家は麦や芋ばかりの薄いおかゆを食べたり、路傍の草を食べて空腹をごまかしていた。祭礼に町内の世話役が寄付を募って家々をまわる時も、この家の前だけは素通りしていったという。家族は次々と栄養失調に陥り、食べ盛りの子供たちは一日中空腹を訴えて泣いていた。

(中略)

生と死との皮肉な繰り返しが続いた我が家も、終戦後広島に戻ってやっと落ち着きを取り戻した。戦時下で資材の調達に難儀を極めた、父の電気バリカン製造事業も軌道に乗り始めた。

昭和二三年十二月、男児が誕生した。私である。男児の出生に絶望していた父は狂喜し、縁者の間をふれまわったという。

太閤秀吉は誕生したばかりの我が子、秀頼を一度城内に捨て、それを家臣に拾わせてきたという。拾い子は丈夫に育つという。人間の胎内から生まれ出たものでなく、拾い子は神仏の子という迷信がある。神仏は自分の子だからむやみに死なせたりはしない。父はただ丈夫に育ってくれ、と念じながら秀吉と同じことを試みたという。長男孝則を二歳で失って六年目のことである。

虚弱ながらもどうにか私は成長し、小学校に通い始めると、父はどこへ行く

にも私を伴い、学校の授業の最中でも見境なく教室の扉をガラリと開けた。風呂には無理やり私を誘い、寝る時はいつも私の手をかたく握りしめて寝た。野球のグラブのように大きく、乾いた父の手の感触は今でもふとよみがえってくることがある。布団のなかで私が寝返りをうとうととしても、眠っているはずの父の手は容易に私を離さなかった。無邪気に眠る父の寝顔は、いつも目覚めてもいつも私の眼前にあった。

父と私だけの貴重な思い出を続けよう。

いつだったか、父と私は父の知人の葬儀に参列し、私と父を乗せた自動車は棺を納めた霊柩車の後を追って火葬場に向かった。親族との最後の告別を終えた白木の棺は、辺りの静寂を破る金属性の音とともに火葬場のカマドに消えた。「ガシャーン」というカマドの扉の閉じる音は、まさにこの世からの隔絶の音であった。あの音。凶音に接するたびに私の胸に甦ってくる、冷酷で厳しいあの音。

火葬場の様子を目を食い入るように見つめている私に、父は放心したようにこう言った。

「賢くん、あのカマドのなかに入ったら、もう何もかも終りで。人間、一生のうち必ずあのなかに入らなきゃならんのが……」

私はこの時ほど生の危うさにおびえたことはない。生は死の影をはらんだまま浮動し、死は生に仮の宿を貸しているに過ぎないのだ、と。今となって考えれば、私はこの時初めて直感的に生の認識に触れたように思う。

知人に最後の別れを告げ、人生の無常をひとりごとのように嘯みしめた父自身が、それから五年も経ないうちに自ら生との隔絶の扉に消えていこうとは夢にも思わなかったろう。

後年、父と二人で死者を送ったと同じ場所で、今度は私ひとりぼっちで父のなきがらをそのなかに見送ったのだ。



(中略)

「わしは食べることが道楽じゃ」と自らよく放言していたように、父は何よりも美食を好んだ。一度に食べる量も、十九貫という巨体を支えるに余りあるほどの量だった。酒も弱かった父にとって、三度の美食多食は大きな楽しみだったろう。しかしそれは胃腸を損ねる原因になった。食卓を前にすると節することを忘れてしまう父は、たびたび慢性的な胃腸の不調を訴えた。父の引き出しには何種類もの胃腸薬が入っていて、家族には内緒でこっそりそれを飲んでいったようだった。薬で不快をごまかし、食事時にはそのことは忘れたように青年のような食欲をみせるのである。父は世態人情の奥底を見通すような性向をもっていた反面、時々このような子供じみたあどけなさをのぞかせることがあった。

父が死ぬまで使っていた机の引き出しには、あらゆるガラクタの類がつまっていた。ペン先を研磨する小さな石のやすり。易者が使うような大きな天眼鏡。数本の胴の太い金ペン。小学校の修学旅行で私が父への土産に求めてきたキセル。いまそれらを手にとってみると、何ひとつ思い出の種のないものはない。細々としたそれらの一つ一つに父の面影が宿っているように思える。

昭和三五年初春。父は医師から胃潰瘍と診断され、数日のち入院した。自分の体に絶対の自信を持っていた父はあまりの事態にとまどい、母の説得にもなかなか入院を承諾しなかった。入院の直後、胃噴門部の除去手術を受け、しばらくは小康を保った。父の本当の病名は胃癌であったが、これを知るものは家族のわずかに限られた。家族は会話のなかで「癌」という言葉を意識的に避け、父の病気については自分自身さえ偽ろうとしていた。

退院した父の頬は窪み、顔色は土のようで、以前の滌刺とした面影は全く失われていた。

病床にあつては苦しみをごまかすように大声で母を呼んだり、見舞客に笑顔を見せて高談放語してはいたが、やはり虚ろな弱々しさは隠せなかった。

体具合の良い時は「千鳥」の謡を口ずさんだり、庭を歩いたりしていたが、病状がはかばかしくない時はベッドに横たわり、じつと庭を見つめて何事か考えていた。私が学校から帰って父の部屋をのぞいて声をかけると、父は短い返事を返すだけで、再び眼を庭に戻した。

(中略)

昭和三五年十月、福島県の知人から一箱の梨が送られ、父はこのような礼状を書き送っている。

「……最近、鳥取県産出の二十世紀梨が出回りだしたので、西瓜が無くなると

同時に三度三度の食事に二十世紀梨を食べております。極端に申しますと小生は、三月以来、今日まで西瓜と梨で命をつないできたような気持ちです。本日、貴殿より沢山の小生の最も好物であり、かつまた命の綱でもある梨を送っていただきまして何より嬉しうございます。

十月六日で手術後七ヶ月目になりますが、その間梅雨と夏の最も暑い七月二十日頃から八月下旬までの気候には堪えられないほどの苦しみでした。手術部が痛むのです。とにかくこの年齢になって今まで経験しなかった病気の苦しみを毎日毎日経験しております……」

秋も半ばを過ぎても父の病状ははかばかしくなく、一進一退を続けていた。病床の父を慰めるために私が松虫や鈴虫を買ってくる、父は虫籠のなかから放してやるように命じ、庭のいたるところで鳴く虫の音色に耳を澄ませていた。人間がいくら可愛がってやっても、狭い虫籠のなかでは虫は思う存分羽を広げられないからだという。虫にとっては土の上、草のなかにいることが一番幸せなのだ、私に教えたことがあった。

虫は籠に拘束され、自分は病氣につながれている。自由を奪われたものの無念さを、それとなく私に伝えたかったのかもしれない。

(中略)

病床にあっても父は体力の許す限りペンを持ち、仕事や私的な手紙を書き続けた。死の十日ほど前までも手紙を書き続け、最後の手紙などは文字が便箋の線上を大きく外れ、字体は統一を失っている。おそらく、あえぎながら、あえぎながらペンを進ませたのだろう。

秋の終りには名前の「寅」を「虎」に改めた。これについて次のような書簡を知人に宛てて書き送っている。

「……先般貴殿よりお尋ねの私の名「虎」につきましては、元の「寅」は同じようでも弱いトラで、もうあの「寅」は終着駅へ来てしまったので、今度は元気なトラ、即ち「虎」に改名して余生を元気に過ごしたいという意味で改名した次第です……」

改名による福音は父のもとへ訪れず、とうとう父は昭和三六年の正月を病床で迎えた。

父が再び入院したのはまだしめ飾りも残っている頃だった。癌の毒素が急激に父の体を侵し始めたのである。診察室から病床へ戻る途中、父は茶褐色の茶がらのようなものを吐いた。食道から胃への道が水も通さないほどにまで閉ざされていたのである。屍血のような汚物を戻した父は、這うように病室のベッドに戻った。

二度目の手術は脾臓と胃のすべてを摘出するという大手術だった。体は極度に衰弱しており、手術中に絶命する可能性も医師から伝えられていた。

手術の前の病院の奥深いざわめきと、手術中の恐ろしいほどの静けさは忘れることが出来ない。次々に駆けつけてくる親類や知人は無言で待合室に腰かけ、ある者はうつむいたまま、ある者は手術室の赤ランプを見上げたまま。心臓の鼓動は脳に響き、心の内に滞るものは次第に大きくなっていった。時計は刻々と時を刻み、待合室にあるものにとって一分は一時間の長さに見える。

(中略)

六月に入って父の病状は急激に悪化した。ある程度予期されてはいたが、こんなにも早くその時が訪れようとは誰も予測していなかった。六月二日早朝には危篤状態に陥り、知人が次々と駆けつけてきた。京都の大学にいた姉は急きよ帰広した

父の脈は途絶えんばかりに弱くなっても、父の精神力は生命を維持した。

「きようは本能寺で織田信長が討たれた日じゃのお」

とつぶやいて、信長が愛踊したという謡曲「教盛」を口にするほどの余裕をみせた。

人間五十年 化転のうちをくらぶれば 夢まぼろしのごとくなり
ひとたび生をうけ 滅せぬもののあるべきか

二日夕刻、死を直前にした病人とは思えないほど確かな口調で、「人の世の無常、健康の大切、無欲で謙虚な人生の必要」を枕辺の家族や親族に説いて聞かせた。

当時まだ中学に入ったばかりの私については、最後まで、息絶えだえに、

「賢司をたのむ。賢司をたのむで」と言い残している。

昭和三六年六月三日未明。父は五九歳でこの世を去った。臨終は平穩であった。内部を侵された蠟燭が、風が吹くでもなくおのずから灯を消したような静かさだった。

父の生涯は私にとって一瞬の花のようなものだった。私の前にわずか十二年の生命をさらし、花は夢のような印象を残しただけで散っていった。「惜しまれて散るは桜の替れ」という父の臨終の言葉が万感の重みをもって私の胸に去来する。いや、幼い私はあの時、生命を惜しむことさえ知らなかったのではなからうか。散る時を待つ満開のわずかな間にだけ、私は無邪気に接したのかも知れない。

まだまだ父については書き残されたことが沢山あるように思う。父の知友縁者をたずねて、父の細かな像を作りあげるとは容易なことかもしれない。しかしそうして出来あがった父の肖像に、私は隔たりのようなものを感じずにはいられない。自分の地肌を表面に露わにすることはほとんど稀であった父を、私自身が自ら垣間見た眼で書いてみたかった。父と私とは血のみでなく、過去の夢のような生活の折々でもしっかりと結びついていたという、自分への証しのためにもそうしたかった。父との思い出は私にとって過去への道標であり、未来への唯一の心のよりどころでもある。意識的に、あるいは無意識に私に授けた父の命がけの教訓を、これからも私のなかで育てていきたい。それが私の父に対する義務のようにも思える。

父は私に数枚の思い出の花びらを残して死んでいった。
そして今年、もう七回忌を迎える。

未完

昭和四二年 夏



挿絵・デッサン

仏原和義

地上五十センチの碧い瞳で

親愛なる「おじさんの青春日記」読者のみなさま。

いつも「おじさんの青春日記」を読んでいただきありがとうございます。初めての執筆から今年でもう十五年になると聞きました。

著者であるボクの父ちゃんになりかわり、読者のみなさまに心からお礼を申し上げます。

ボクの名前は「カウ」。父ちゃんの息子になって今年で十二年になる。

ダルメシアン系と和犬の混血、要するに世間から「雑種」とさげすまれる、素性さだかでない犬なんだ。

「こいつ、犬のくせに体のあっちこっちに年のような斑（まだら）がある。カウ(OW・牛)じゃ」。

この家の次男のひと首でボクの名前があっさり決まった。

黒くて短い毛でおおわれた体のあちこちに、白ペンキでイタズラしたような斑点がある。ボクのルーツはクロアチア、イタリア半島の東、今のユーゴスラビアという国あたりらしい。ボクの眼は絵具にもなる貴石、ラピズスリのような青い色をしている。眼だけは自信がある。

「お前の深くて青い眼はフェルメールの絵のようじゃ」

と父ちゃんはいつも褒めてくれる。思わずボクは鼻をフガフガ鳴らしてしま

う。
今から十二年前、ミニコミ誌の片隅に小さく載った、「子犬いりませんか」の無料広告を見た父ちゃんがボクを迎えに来てくれた。

生まれたばかりの兄弟五匹のなかから、僕をひよいと抱きあげて、

「お前が一番丈夫そうじゃ」

と云って、僕を車に乗せた。ボクの運命がそこで決まった。

何万円もお金を出して犬を買うことを父ちゃんは好まない。値段のついた家族なんておかしい、というのが父ちゃんの考えなのかもしれない。

そうそう、父ちゃんは小学生のとき、家族に内緒で子豚を飼ったことがあるらしい。知り合いの養豚業者に譲ってもらって、物置でこっそり育てていた。一週間もしないうちに大騒ぎになって、おじいちゃんからえらい大目玉を食らったあげく、子豚はすぐに返しに行かされた。あと先考えず、思いついたら即やってしまうのは、小さいころからの父ちゃんの悪いクセだ。

父ちゃんはちよくちよくお酒を呑んで夜なかに帰ってくる。酔っぱらった父ちゃんは寝ほけまなこのボクを小屋から呼び出して、なんやかんやと相談をもちかけてくる。そんなとき、ボクは犬にしかわからない嗅覚で、父ちゃんの服に着いた甘い香水の匂いを嗅ぎとることがある。

「紅（べに）おしろいつけたおねえさん達とバカ話をして、鼻の下のばしとる」

と、父ちゃんの友達がボクに教えてくれたことがある。もちろん、ママに告げ口なんかしない。

時によると父ちゃんは朝まだ暗いうちに突然起きだして来て、ボクをそばに座らせて縁側で本を読む。なにやら難しそうなことをぶつぶつボクに語りかけるが、僕には返事をするすべがない。

休みの日には、よく会社の父ちゃんの部屋にお伴する。父ちゃんはまずコーヒをいれる。それから二人でパンをひとつ分けて合せて食べる。父ちゃんは数字ばかり並んだ書類にしばらく目を凝らしてからファイルにしようと、次はCDを鳴らしてモータールトや映画音楽を聴き始める。音楽で頭のなかのスイッチを、仕事モードから作文モードに切り替えているんだ。

文章は音楽と同じで、リズム（韻律）、メロディ（旋律）、ハーモニー（調和）がとつても大事なんだと教えてくれた。しばらく経つと、パソコンを打ちながら「うーん……」どうかのあ……」という、父ちゃんの唸り声が聞こえてくる。仕上げた文章を読み返しながら、涙をためている父ちゃんを、ボクは寝そべったまま見上げることもある。

ものを書くということは苦しい修行のように見えるけど、組み立てや言葉探しと闘いながら自分の世界を創りあげていく、父ちゃんが一番楽しいひとときなんだと思う。「これだっ」というピッタリの言葉を網にひっつけたときは、それはもう、えも言えずうれしいらしい。「おじさんの青春日記」は一年がかりの父ちゃんのロングドリームなんだ。

ボクのママは、中国山地の深い森の町から父ちゃんのところへ嫁いできた。

「新婚旅行は海外へ連れて行ってやる」

という父ちゃんのいつもの駄ボラに騙されて、結局は九州の離れ小島へ魚釣りに連れていかれたのが真相らしい。ボクは居間の床下に潜んで、よく父ちゃんとママの会話を盗み聞くんだ。

父ちゃんが結婚したてのころは仕事も失敗続きで、保険会社で働くママのヒモをしていたこともあったらしい。父ちゃんはママのことを、

「人の醜い欲が少なくて、なにことも屈託がないのがええ。空を行く雲のような人じゃ」

とボクに話してくれたことがある。

三十なかばの父ちゃんが、億の借金をしてひと勝負しようとしていたころママが、

「これがわたしの貯金の全部じゃ。好きに使ってちょうだい。これでわたしはすっぱんぼんじゃ」

と書いて、何冊かの郵便局の通帳を父ちゃんに差し出たとき、父ちゃんはシびれたらしい。

「よっしゃ、こんどこそ海外へ連れて行っただ」

と陰で涙を流して心に誓ったんだそうだ。でも、その誓いはいまだに実現していない。

ボクも含めて男ばかり、野球部の寮みたいな家で、ママは百年もこの家に住んでいる主(ぬし)のように走りまわっている。

ママが若い頃、大学入学が決まって生まれ故郷を離れる日、ママは半日かけて森の中や道ばたの祠(ほこら)をゆっくり見まわった。ママを育ててくれたふるさとの情景を眼に焼き付けながら、ふるさとお礼とお別れを言っただけで済ませたい。そして、ふたたびこの地に住むことはない、と固く決心して都会へ向かう電車に乗ったんだそうだ。

「……田んぼや畑や森や水の流れのなかにこそ、人の命の根源があるんじゃない」
父ちゃんは口ぐせのようにいつもこう話す。でも、そのくせ父ちゃんは新宿の夜のネオンが大好きときている。このあたりのつじつまの合わないところが、父ちゃんの摩訶不思議なところだ。

「おじさんの青春日記」の歴史とともにボクは生きてきた。毎年、表紙の片隅にボクのイラストを載せてもらっている。このことは犬仲間のあいだでボクの自慢なんだ。

ダルメシアンの寿命は長くて十五年。飼犬は家族のなかでただ一人の主人として仰ぐ。主人に危機がせまったとき、犬は命をかけて主人を守る。年はとつても、猟犬の血をひくボクはいつでもその覚悟は出来ている。そんなボクを、

「おまえ、重貞のまま死ぬんかあ、かわいそうにの。こんどは人間に生まれたいよ」
と父ちゃんは同情してくれる。

人の七倍の速さでボクらは日本の四季を生きている。地べたに鼻を近づけて歩くボクらは、人間よりも誰よりも敏感に自然の移りを感じる事ができる。草の色の少しの変わり方で、季節が夏から秋に移ったことがわかる。土の少しの湿り気で、まもなく雨がやってくる事がわかる。

ちかごろ、道ゆく人たちはなんだか元気がない。うつむいてしまったり、地面の五センチから人間を見上げるボクと、いつも目が合ってしまう。こんなにも美しい、深い国に住んでいて、すごい力をもった人たちはかなりなのに、どう

してみんなしつかり前を向いて歩かないんだらう。真正面をむいて、笑顔で、胸を張って歩いてほしい。



父ちゃんの書棚にある川端康成さんが書いた本のなかに、「雪月花のとき、もっとも友をおもう」

という言葉がある。世界でも稀な美しい自然と数え切れない文化を持つこの国の、信じられないほど細やかな感覚をもった日本人の心がこの言葉に思っている。

友とは人、朋(とも)。そして家族や、愛しいと思うまわりの人たちのことだと思う。舞い降りる雪の美しいとき、あかあかとした月の明かり、香り立つ花を麗しく思うとき、もっとも強く友を想うのが日本人たちだ。犬と違って人間は、おいしいものや遊びを一人占めにはしない生き物だ。

父ちゃんが地球のあちこちを歩いて、いろんな境遇のなかでひたむきに生きている人の姿に遭遇したとき、父ちゃんの頭にまっさきに浮かぶのが友のことなんだと思う。

心震えた出来ことや、出会いの感激を大切にしまっておいて、なにかの形にしてみんなに伝えたい。出来ることならこの昂ぶりを誰かと共にしたい。そんな思いが父ちゃんに「おじさんの青春日記」を書かせているんだと思う。

父ちゃんの描く物語は片想いや思い込みなのかもしれないけど、人だって、犬だって、一人きりで生きていくことは出来はしない。そんなことを考え続けているのが父ちゃんだと思う。

毎年、父ちゃんから届く春のメッセージを心待ちにしてくれる、日本や外国の読者がいる。父ちゃんにとってその人たちこそ、宝物のように大切な人たちなんだとボクは思う。この人たちがいたからこそ、父ちゃんが十五年ものあいだ、投げ出すことなく書き続けられたんだとボクは思う。

それに、各地の読者から父ちゃんに届くニュースは、新規の事業や商品を創り出す勉強を生きがいに行っている父ちゃんにとって、ものすごく貴重なヒントになっているに違いない。

父ちゃんにはこれからもずっと書き続けてほしい。

読者の皆さま、そして毎年、制作を助けてくださっている皆さま、どうかこれからも父ちゃんに力を貸してあげてください。父ちゃんの思い、尽きるまで。いつか父ちゃんが「名犬・カウ」の物語を書き残してくれたら、と思う。もしも実現したら、これこそ人につき従って短い生涯を送る、飼犬の冥利だと思う。これがボクの夢なんだ。

里吉カウ

おじさんの青春日記 その15 十五周年記念号

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番一〇号

株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二) 二三一・三一〇九(代表)

FAX (〇八二) 二九一・三三四九

E-mail ken1221@urban.ne.jp

冊子頒価 一〇〇〇円(送料別)

発行 二〇一一年(平成二三年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ

ホームページアドレス

http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/